

氏家洋子著 『言語文化学の視点』

—「言わない」社会と言葉の力—を読む

細川英雄

近代の言語学が、ラングとしての言語構造を主たる研究の対象とし、その言語使用をささえる文化の問題についてほとんど問題にしてこなかったことは、すでによく知られているが、近年のことはをめぐる議論においては、もはや文化の問題を無視して語れない状況が生まれている。たとえば、言語学における語用論の台頭はそのことを明確に表しているし、それは言語とそのコミュニティを人間のインターラクション活動の一部としてとらえようとする社会言語学の動きとも連動している。同時にまたそれは「言語とは何か」という本質的な問いとも無関係ではない。

本書は、こうした言語使用をめぐる文化と人間の問題に、さまざまな学際的な研究成果を手がかりに切り込もうとする果敢な試みである。名づけて「言語文化学」という。

本書の冒頭にはまず、ことばがその構造として自立した存在ではなく、社会の文化とともにあることを象徴的に語るエピソードとして、有名な「ベニスの商人」の血と肉の話があげられている。何よりもそのような視点からことばと文化の問題を問い直そうとする元気がすがすがしい。そのこと自体すでに自明のことである

にもかかわらず、多くの国語学・日本語学の研究者が忘れかけている姿勢だからである。この時点で、著者自身の立場は次のようにきわめて明解である。「私達は今を生きる人として、そのような存在である言葉についてより深く知り、自らを縛っているものがあるなら、自らを解き放つための意志的な行動をとりたい。見えないものにとらわれているのはごめんだ。捉われていることに気付かずにいるのもごめんだ」(まえがき)

第Ⅰ部は、言語や人間について考える場合の、大前提としての〈普遍性〉について語られている。本来、言語活動としてのラングージュは、普遍的なものである。言語学や日本語学をめざす人ばかりでなく、母語を相対化させて考えようとする人ならだれでも、こうした普遍性から出発することが必要だろう。

こうした普遍性の理念から発展し、第Ⅱ部では、日本社会の特質と日本語の表現との関係が述べられる。例えば、「定期券〇はつきりお見せ下さい」を例に「は」と「を」の使用によって、どのように言語表現主体の認識世界が異なるかが明確に分析・記述される。さらに、この「XはY」という文構造が文脈に依存した多くの意味を持つところから、こうした構造を「合過程構造」と呼び、他の表現が可能であるにも関わらず、こうした表現構造が選定されるのは、日本という社会が永く同質社会として機能してきたからであり、その日本社会の中で、効率のよいコミュニケーションの手段として「合過程構造」が発達したとする。そして、第Ⅲ部では、そうした日本社会が従来の「言わない/言う必要のない」社会から脱して、新しいコミュニケーションの方法を

考えなければいけないとし、日本のことばや文化のあり方を根本的に考え直すことが必要だと著者は主張する。

さて、本書の第Ⅰ部の普遍性の認識と、第Ⅲ部の新しいコミュニケーションへの志向には、評者としてもまったく同感である。日本語を母語とする人はもつと母語を相対化して考えることが必要だと常々思っているし、「言わない／言う必要のない」日本社会に暮らしていると、たしかに本書の指摘するような、さまざまな息苦しさがあることはたしかである。この閉塞した状況をことばの力によってなんとか変えていきたいという著者の思いには深く共感するものである。

ただ、第Ⅱ部の「長く同質社会としての日本社会の中で、効率のよいコミュニケーションの手段として「合過程構造」が発達した」という展開については、やや疑問を呈せざるを得ない。それは、社会構造と言語の関係についての認識の仕方の問題である。たしかに人間の認識の仕方は言語によって決定されるのだが、その認識と社会構造とはどういう関係にあるのだろうか。問題は、言語の構造なのか、コミュニケーション行動のストラクチャなのか。それともその行動にもなる人間の意識の問題なのか。あるいはまたネウストプニーのいう「実質行動」の問題なのか。そうした問題の所在が必ずしも明らかではないように思われる。

たとえば、「XはY」という文構造が同質性の社会構造を象徴するものだとすると、社会構造と言語構造がわかちがたく密接な関係にあることになる。しかし、「XはY」という構文は、万葉の時代からすでに日本語の中にあり、「は」が文の陳述の関わる

辞として機能してきたことも周知のことである。そして、日本の社会の同質性が強調されるようになるのは、江戸幕府下における二五〇年の社会においてである。つまり、「は」は自然言語としての日本語において所与の構造として古代から存在するもので、それをただちに社会構造と結びつけることが可能なのかという問題なのである。あえていえば、第Ⅰ部の「普遍性」によって、日本語が曖昧で非論理的だから日本人も曖昧を好むといった従来からの俗説を真つ向から否定しながら、社会と言語の関係の位置づけによってはまだ同じところに戻りかねない危惧を感じるからである。

したがって、もし社会構造と言語構造の共通性を社会言語学的に実証しようとするならば、各時代の言語使用と社会構造との関係を明らかにしなければならぬだろうが、著者の関心はおそらくすでにそこにはないように思われる。それは、サブタイトルにもあるように、本書が「言わない／言う必要のない」社会とそこでの言語使用のあり方と人間の態度そのものを問題としているからである。それはもはや言語の構造の問題ではなく、言語を使用する人間の意識の問題になるはずで、さらに言うならば、それは言語学の範囲にとどまらず、哲学や政治学あるいは教育学の問題にかぎりなく近づくことになる。だからこそ著者は「言語文化学」という新しい名称によって、この問題を学際的に捉えることを試みようとするのだろう。

ここで「言語文化学」は、経験科学としての言語学の特つ限界を超えようとする。この研究領域は、ことばの運用を通して人間

と社会のあり方を考えようとすることを目的としているから、具体的な資料を実証するタイプの論文ではない。こうした理論的な姿勢に対して、その理論の具体化の実際上のプランを示すことがしばしば要求されるが、本来、理論構築という行為そのものがそのような青写真としてのプランになじまない面を持っているのではなからうか。その意味で、本書の立場が、目に見えるものの実証によって事実を確認する経験科学の観点と異なることは自明なのである。

そうすると、本書がめざすものは、言語による文化の検討なのか、それとも文化による言語の検討なのか、あるいは「言語文化」という、新しい領域の設定なのか。本書のカバー表紙には、英語のタイトルとして「Cultural Linguistics」（文化言語学）と記述されているが、たとえば「社会言語学」と「言語社会学」とが異なるように、「言語文化学」と「文化言語学」とではその対象や考え方・方法論もかなりちがってくるように思われる。

ここで、この分野を研究としての普遍的なレベルに高めるためには、学際的な視野を持ちつつも、言語とその文化の問題を自らの固有のフィールドに引きつけ、そのフィールドから発信するところが重要だと評者は考える。

たとえば、本書では太宰治の小説の主人公による「世間は個人

である」という表現を手がかりに、日本社会の体質を批判的に考察することを試みる。そのこと自体はきわめて興味深い指摘のだが、残念なことに、この試みは日本社会の文化解釈論に終始してしまっている。社会現象を解釈論として論評することでは、おそらくその社会文化変革の力にはなり得ないだろう。

では、固有のフィールドから発信できることは何か。それはまず、言語習得やコミュニケーションの場における実態をありのままの「事実」として提示することではなからうか。つまり、この社会における個人の言語文化行動をどのように記述できるかが当面の課題であろうと思われる。こうした基礎研究の中で、この「事実」を観察・分析・解釈するプロセスの開示が、日本社会の言語コミュニケーション行動の矛盾や問題点を浮き彫りにするだろうし、そのことによって「学」としての説得力が生じるのではなからうか。

従来の言語学がほとんど問題にしようにしなかつた事柄について果敢な挑戦としての一石を投じた本書から、今後著者がどのような方向で発展をめざすのか、大いなる関心を持ちつづける読者の一人でありたいと思う。

一九九六・三 おうふう A5判 一九六頁 二六〇〇円